

三宝絵 (上十二) と出典の文章

太田 絃子

三宝絵詞(三宝絵)は源為憲が冷泉院第二皇女尊子内親王に献上するために書かれた。上巻十三話・中巻十八話・下巻三十一話の多くは出典を明記しており、それらの出典については、山田孝雄博士「三宝絵詞の研究」を始めとして、多くの先学の研究が知られている。^①

先般、石山寺本太子須大摩經の訓読のために、三宝絵詞上巻十二話の文を参照し、その三種類の表記形式の異った伝本と、出典と明記された太子須大摩經・六度集經卷二須大摩經や、関連して法苑珠林卷八十所収の仏説太子須大摩經等の文章を比較対照させた際、いろいろと気づくことがあった。それらの中から、本稿では三宝絵詞上巻十二話の両出典からの摂取状態について述べることにする。

一

資料として、三宝絵詞の本文は「諸本対照 三宝絵集成」所載のものを用いた。^② 三種類の伝本のうち、部分的に振仮名送仮名の施された変体漢文は、前田育徳会尊経閣文庫蔵醍醐寺釈迦院旧蔵本影写

本の昭和十年前田侯爵家複製公刊された「尊経閣叢刊」第三十三に依拠し、漢字片仮名交り文は、東寺観智院旧蔵本の昭和十六年影印公刊された古典保存会複製本に依拠し、漢字平仮名交り文は、関戸家蔵本並に東大寺切の写真に依拠し、出来るだけ厳密に活字に移した由である。^③ 新出の高山寺蔵三宝絵詞章の遺文は、内容が下巻七月であるため、本稿で取り扱う対象からは外れる。対象とした説話部の分量は、前田家本の変体漢文が一八九一字、東寺本の漢字片仮名交り文が漢字だけ数えて二〇〇九字、^④ 東大寺切の漢字平仮名交り文が七〇三字である。なお、漢字に交えられた片仮名は小さく書かれ、特に東寺本の上巻はいわゆる片仮名宣命書きで、送り仮名部分が右寄りに小書きされ、三字以上になる場合は二行に小書きされているのであるが、本稿では印刷の都合で、二行の小書きにしなかった。また引用の際の出典名として、前田家本は①、東寺本は②、東大寺切は③と略記する場合がある。

出典については、上巻十二話の末尾に、
 可見太子須太那經六度集經也 ①

太子須檀那經六度集經等ニ見タリ ㊦

と明記されている。この出典の本文は、『大正 大藏經』第三卷所収の太子須大摩經（西秦沙門聖堅奉詔訳）と、同書同卷所収の六度集經卷第二（吳康居國沙門康僧会訳）（一四）須大摩經とを用いた。分量は、漢字で各約七〇〇〇字と三四〇〇余字である。

太子須大摩經には、もう一種『大正 大藏經』第五十三卷所収の法苑珠林卷第八十（西明寺沙門釈通世撰）通施部第四仏説太子須大摩經の文がある。この本文については、森正人氏が「三宝絵の成立と法苑珠林」で、

三宝絵上巻には十三条の釈迦本生譚が語られるが、そのうち法苑珠林との一応の関連が見出せるものは次の七話である。

と、須太子太子についても表示し、

このうち（中略）は原典か法苑珠林かの判別はできない。

（下略）

と述べられたが、高橋伸幸氏は森氏のこの部分を引用した後、『法苑珠林』は原経たる『太子須大摩經』の所々を省略しており、『三宝絵』はこの省略部をも訳出しているもので、本条に関する限り『法苑珠林』に拠ったものでないことは明らかである。参考までにその一例を次に掲げてみる。（下略）

と述べ、二人の子を翁の乞うままに布施し、随い行かせる場面をあげておられるが、その通りで、直接の出典とみなすわけにはいかない。

法苑珠林は、太子須大摩經の枝葉部・重複部を省略して、七〇%弱に縮められている。法苑珠林に省略されている部分で三宝絵にとり上げられている場面・描写は、右の森氏の指摘された一番広範闊な場面の他にも、檀特山中の草庵を、山の中巖の辺に「三ツノ扉菴ヲ並べ」作つたと語り、山中で月日を過ごすとき「山ノ鳥悲シク鳴ク」とか、鳩留國の老衰の翁の十二醜の姿を「髪白ク面黒ク目多々礼口チ由加女利」と、太子須大摩經・六度集經の文に即して活き活きと描写しており、ざっと調べただけでも八箇所指摘できる。従って三宝絵の作者が、上巻十二話を書く際、太子須大摩經や六度集經を見ないで法苑珠林に収められた仏説太子須大摩經に依って書いたのでないことは確かなので、法苑珠林は上巻十二話の出典からは除外した。

二

二書の出典をどのように取捨しているか、概括的なことは塚田晃信氏の「三宝絵の仏典受容」で次のように述べられている。

この両話（筆者注・第十二・十三話のこと）も、仏典受容の域外にあるものではなく、仏典の翻訳と見るべきものであるが、細部の叙述に含まれているニュアンスに、文学的香気といってもよい、すぐれた表現を見てとることができる。

また、高橋伸幸氏は、文・語句の表現について、

各説話の出典記載は、必ずしも一つの文献名だけとは限らない。複数の文献名を挙げているものに、上1・上4・上12・

上13・中1・中2・中3の七例が存する。しかし、この複数出典説話については余り触れている人がおらず、触れていても、たとえば、上12の須太那太子の条にも「太子須闍那經・六度集經等に見タリ」と二つの出典を掲げているが、この両出典をどのように取捨して撰取したかについては、今までのところ管見に入っておらず、(下略)

さて、こうして上12は、その殆どを『太子須大拏經』に基づいて話を進めているが、話中『須大拏經』に存在していない記事が中間部と条末の二箇所に存在する。実はこの二箇所は『六度集經』巻第二に拠って挿入及び付加したものである。と述べて、六度集經に依った二箇所を、三宝絵・太子須大拏經と対照させて示しておられる。

確かに存在するという証明は存在する例を明示すればそれで十分である。しかも、孤例では不十分だが、二例掲げればそれで十分といえよう。しかし、高橋氏のこの指摘では何か物足りなさを覚える。実体から余りにもかけ離れ、誤解を生じるのではないかと思うのである。

高橋氏によれば、上巻十二話は殆ど太子須大拏經に基づいて書かれ、太子須大拏經に存在しない二箇所だけ六度集經に依ったということである。これでは、その二箇所以外は六度集經と無関係であるかのような誤解が生じる。

今回の私の調査では、三宝絵は、太子須大拏の行動を中心に全

体的に省略縮小されているが、大体は太子須大拏經・六度集經の両方に密接な関係をもちながら話は進められており、部分的には所によつては太子須大拏經にのみ依拠し、時には六度集經にのみ即し、また両經典の表現から離れて説話作家の文学的潤色が行われていることなどが判明した。単に仏典からの翻訳というのにとどまらず、新たな説話作品としての資格を保ち得ていると思われるのである。

三

三宝絵と出典とを比較するのに先だって、三宝絵の異った表記形式による三伝本と出典である二經典との文を、上下の位置に対照させて示した。冒頭部分と、東大寺切の初めの部分とである。

<p>太 須 經</p> <p>1. 往昔過去不可計却時。 2. 有大國 為棄波。其王号濕波。 3. 以正法治國子 大 4. 不枉人民。 5. 王有四番大臣。主六十小國 八 百 聚 落。 有 白象五百頭。王有二万夫人了無 有子。(四節二九字略) 6. 至滿十 月 生 太子。(三節二一、字略) 7. 便笑太 為須大擎。 8. 9. 10. 子</p>	<p>六度集經</p> <p>昔者 棄波國王号曰濕隨。 治國以正。 黎庶無怨。</p>	<p>前田家本</p> <p>昔 棄波國王</p>	<p>東 寺 本</p> <p>昔 折波羅國ノ王</p>
<p>太子須大擎經</p> <p>11. 山中亦有學道者。(三節一六字略) 12. 山上有一道人名阿州陀。年五百歲有 絕妙之德。 13. 太子作礼却住自言。</p>	<p>六度集經</p> <p>山中道士皆守節好學。 名阿周陀。久処山間 有玄妙之德。 即与妻子詣之稽首。 却叉手立。</p>	<p>前田家本</p> <p>又山中有行人 尋不遇(遇?) 此</p>	<p>東 寺 本</p> <p>山ノ中ニ 行人有リ 尋テ 是ニ 会ス たつねてこれにあひぬ</p>
如			
如			

14. 今在山中何所有好甘果泉水可止処耶。向道人曰。	阿州陀言。是山中者皆是福地所在可止耳。道人即言。今此山中清淨之處。	15. 卿云何然妻子来而欲学道乎。(一八節一一八字略)道人問太子。所求何等。太子答言。	16. 欲求摩訶衍道。道人言。太子功德乃爾。(三節二七字略)	17. 道人即指。	18. 語太子所止処。	19. 太子則法道人結頭編髮。以果水果瓜為飲食。	20. 即取柴薪作小草屋。	21.	22. 並為曼碁及二小兒。各作一草屋。凡作三草屋。	23. 男名耶利年七歲。	24. 著草衣随父出入。
問 ^テ 可住山之所	道士誨之。	願垂洪慈誨成吾志也。	語 ^テ 欲 ^ヒ 習道之志 ^ス	行人驚 ^キ 悲 ^テ	教 ^フ 其処	太子山中 ^カ 巖 ^ノ 辺 ^ニ	柴草為屋。結髮菰服。食果飲泉。	並作 ^ル 三ノ柴 ^ノ 廬 ^{リヲ}	一自居 一令。妻住 一令遊子	男名耶利。 男子ハ七歲	衣小草服從父出入。
山 ^ニ 可住 ^キ 所 ^ヲ 問 ^ヒ	道士 ^ヲ 習 ^{ハム} ト思 ^フ 志 ^ス	道 ^ヲ 習 ^{ハム} ト思 ^フ 志 ^ス ヲ語 ^フ	道士 ^ヲ 驚 ^キ 悲 ^テ	其 ^ノ 所 ^ヲ 教 ^フ	太子山 ^ノ 中 ^ノ 巖 ^ノ 辺 ^ニ	三ツノ廬 ^ヲ 並 ^ヘ 作 ^ツ	一ニハ自 ^ラ 居 ^{タリ} 一ニハ妻 ^ヲ 令 ^ム 住 ^ム 一ニハ子 ^ヲ 令 ^ム 遊 ^ス	男子ハ七歲 ^{ニシテ}	父 ^ニ 随 ^テ 出 ^ル 入 ^ル	男子ハ七歲 ^{ニシテ}	父 ^ニ 随 ^テ 出 ^ル 入 ^ル
山にすむへきところをとひ	みちをならはむとおもふところさしをかたらふ	たうしおとろきかなしひて	そのところをうしふ	太子山のなかいのほとりに	ひとつにはみつからゐたり	ひとつにはめをす(以下ナシ)					

まず、前田家本と東寺本とについて検討する。

この二本は表記形式が異なるから、語順や仮名表記の有無は当然相違しているが、前田家本の変体漢文と東寺本の漢字文に片仮名を交えた漢字片仮名交り文とは、漢字についておおよその対応が見出される。その対応を数量的にとらえる一方法として、両方の文を漢字四字程度の文節（迎文節）に区切って比較することとした。四字程度としたのは、出典である經典が漢字四字でまとまる文体であるからそれに準じたのであって、実際の作業までは二字・七字位の中が生じた。この一区切りを本稿では「節」と呼ぶ。

この方法に従うと、分量は、前田家本四七二節、東寺本四七九節であった。

前田家本にのみ存在して東寺本に対応する節のないのは三箇所四節、逆に東寺本にのみ存在して前田家本にないのは五箇所一一節であり、各本の〇・五％及び二・三％に当たり、非常に少い割合である。これらの対応する節のない箇所について、出典をみると、いずれも典拠したと思われる表現が存在する。

●鹿ノ皮ヲ着杖ヲツ木太留貧キ物八人ヲ造テ太子ノ許ニ遇テ
使ヲ遇太子許

●道士八人即行持杖。遠涉山川詣葉波國。

●遺梵志八人之太子所令乞白象。若能得之吾重謝子。受命即行。著鹿皮衣履屣執瓶。杖遠涉歷諸郡縣千有余里。到葉波國。

これは東寺本6行目の例であるが、他に東寺本28・29・30・118・120・144・前田家本16・17・66・66の各行についても同じである。

従って、他の一本に対応する部分のないことに關しては、書写者の付加挿入した語句が偶然全て出典と合致するなどとは考えられないし、書写者が出典を調べて確かめながら独自に書き加えていくということも考えられないので、書写の際に前田家本・東寺本の各々で適宜省略したか又は脱落したと考える以外にはなからうと思われる。そうすると、書写本としては東寺本の方がより忠実な本文ということになる。

次に用字についてみると、漢字四字程度の短い節が、語順はさておいて、同じ漢字の用いられているのが一二〇例二五・六％である。もし同じ漢文等の文に基いて二本が書かれるか、一本に基づいて他の一本が書かれるかしたのであれば、もっと同じ漢字を用いて同じように書かれた節が多く存在するのではないだろうか。事實は、似た文ではあるが、ほぼ同意の別な漢字を用いるか、別な漢字を加えて表現を詳細にしたり陰影を加えたりして、他の多くの節が、漢字の数・用字まで一致していないのである。

前者は、例えば前掲の対照した例文18のように、「ところ」の漢字表現が前田家本では「処」、東寺本では「所」となっているのや、例文8で「東」形となつていようなのといい、他に例は多い。このように二本で漢字が対立して用いられているのは、多少の混用もみられるけれども、四十例を越える。主だったもの

次に例示する。

前田家本 我 宝 此 還 往 言

東寺本 吾 財 是 返 行 宣 申 云

書写する場合、全文にわたり、多種の漢字について、もとの文と異なる漢字を使い続けるということは、普通には考えられない。恐らく、変体漢文である前田家本と漢字片仮名交り文である東寺本との間に、仮名書きされた文があったと先学の推定しておられるように想定すれば、仮名文から漢字を用いた文に書き改めた人は、その人の日頃用いている漢字ではば一貫して書くことになるであろうから、この漢字対立の不思議の説明がつけられると思う。これらの対立する漢字の使い癖から、書写者推定の手掛りが得られないものかと考えている。

後者の、別な漢字を加えている云々は、一方にのみ敬語表現の漢字が加わっていたり、会話文の前後に「云ふ」意の表現があったり、訓点語では読み添える形式体言の「コト・モノ」等を漢字片仮名交り文で漢字書きしていたり、文末助詞「也」等の使用など、いろいろな場合を含めている。

これらについても、前者の場合と同様に二本の間に仮名文を介していると考えと、いろいろの場合の説明がつけられる。

前田家本と東寺本とは、漢字四字程度の短い節を単位として考えて漢字の完全に一致する節が約二五%と意外に少いが、対応のない節は三%弱しかなく、他も大体が一致する表現で叙述されて

いて、当然のことながら内容はほぼ同じであることがわかった。

続いて、東大寺切の文は、前田家本・東寺本両者に対して、どうであろうか。

東寺本は、真名本を書き改めたものかといわれた春日政治博士の説もあるが、山田孝雄博士の「東寺本は仮名書の本を基にしてそれを漢字を多くして書き改めたものであろうと推定せらるる」という説が、宮坂和江氏・水田紀久氏・春日和男博士等にも支持されている。私も同意見である。また春日和男博士は山田博士の説を受けて「前田家本と東大寺切とは共通点が多いことも事実であり、」と述べておられる。

ところが、今回調査対象とした上巻十二話で東大寺切の存するのは、先に述べたように六葉七〇三字の少量ではあるが、その範圍では、東大寺切と非常に密接な関係にあるのは、前田家本ではなく、東寺本である、という結果が出た。

三本を対照し、漢字中心にみて前田家本と東寺本とに相違がある場合を全て書き抜くと、次の表の通りである。

前田家本	東寺本	東大寺切
<p>25. 行人驚^キ悲^テ 26. 誰^カ仕^レム 27. 妻^云 28. 須大衆 29. 翁懸杖来^ル 太子所^ニ 30. 尔時 31. 有慈悲之由候^フ也 32. 太子云^{ハク} 33. 昔我^レ作^テ何罪 34. 被^テ 結國王種 35. 成仏之時 36. 長悔 37. 並作^ル三ノ柴ノ塵^リヲ 38. 太子強^ヒテ言^ヒ誘^ヘテ 39. 引^テ授^ク時^ニ 40. 子逃^ケテ到^テ 太子之前^云ク 41. 終^ニハ皆得^ク別 42. 自得導度 43. 教誘授</p>	<p>道士窺^ハ(驚^キ悲^テ) 誰^カ被^仕レムト云^フ 妻又云^ク 須太那太子^ハ 翁^ナ太子ノ許^ニ杖^ニ係^テ尋^テ来^レリ 此時^ニ 候^{ツル}也ト云^{ヘハ} 太子 吾^レ昔^シ何^カナル罪^ヲ造^ナ 國王ノ種^ニ生^レテ 吾^レ仏^ニ成^{ナム}時^ニ 永^ク別^レム事^ヲ 三^ツノ扉^ヲ並^ヘ作^リツ 太子強^ヒテ誘^ヘテ 手^ヲ引^テ授^クル時^ニ 子逃^ケテ 太子ノ前^ヘニ入^テ 遂^ニハ皆長^ク別^レナムトス 自^ラ將^ニ引^導ス渡^{サム}ト 教^ヘ誘^ヘテ強^ヒテ授^レトモ</p>	<p>たうしおとろきかなしひて たれかつかはれむといふ をんな又いはく すたな太子は おきな太子のもとにつゑにかゝりてたつねきたれ り このときに さふらひつるなりといへは 太子 我ひかしいかなるつみをつくりて こく王のたねにむまれて 我ほとけになりなむとき なかくわかれむことを みつのしはいはりをならへてつくりつ (以前ナシ) 子しひていひこしらへて こをとらする時に こにけて太子まへにいたりて つるにみなわかれなむとす おのつからまさにみちひかむと こしらへてしひてさつけつれとも</p>

一九例のうち、東大寺切が東寺本と一致するのは25→36の一・二例、前田家本と一致するのは37・38のみである。東寺本と一致しない37は「しはのいはり」の漢字化に問題があり、38は「いひ」40は「た」を欠かなければ一致するという程度の相違である。

東大寺切の存する部分全体を調査した上でないと確実な結論は下せないが、上巻十二話に関しては、東大寺切は東寺本と密接な関係があり、東大寺切の平仮名文を忠実に漢字片仮名交り文におすと東寺本になるようで、前田家本との隔りの方が大きいことがわかった。

四

次に、出典である二經典の文章を比較する。

太子須大摩經は独立の經典として漢訳され、「聞如是」で始まり、仏と弟子との對話があり、壇波羅密を行って仏となったこと、その本生譚として太子須大摩の話が語られていく。

六度集經には八巻にわたって話られる本生譚の一つとして巻第二第四章に須大摩經（須太摩太子本生）が収められている。六度集經巻第一の冒頭に「聞如是」があり、巻第二の須大摩經では最初から棄波國王が登場し物語は展開していく。

經典としての構成も異り、訳者も別で、六度集經の方が二分の一弱の抄訳であるために部分的に訳文の密度や用字用語の相違がある。概して太子須大摩經の方が詳しいが、六度集經の方が詳しい部分もある。その一箇所が高橋氏の指摘しておられる、去った

二児をしのぶ母の悲しみをつのらせる鳥獸の泥人形の描写であり、もう一箇所更に詳述され筋の展開にも多少影響する所もあるのは、布施された二児が老人から逃れ池に身を潜ませたが発見されて杖で打たれ傷つき天神のはからいで傷は回復し飲食も与えられた瑞奇を語る部分で、後者は三宝絵には採用されていない。その他は、内容的にはほぼ同じで、共通部分も当然多い。

太子須大摩經の「聞如是」から壇波羅密の部までを省いて、説話部から両經と三宝絵の二本とを対照させた前掲の表にしたがって、文章を比較検討する。

先づ、例文2の國名が、前田家本では「棄波國」、東寺本では「折波羅國」となっており、出典は共に前田家本と同じである。

例文6の太子が居たことを述べる所で、前田家本で「唯一」、東寺本で「只独ノ」となっているのは、出典にはない表現で、共に一人子であることを印象づけ、その太子を後に國外追放しなければならなくなる親の悲しみを強調しようとする作者の配慮がうかがわれる。

8の太子の容貌の描写は六度集經の「容儀光世」に依拠し、太子の人物は六度集經の「慈孝難育」を採用しないで、檀特山に向かう途中も父の命に逆くまいと努め、山での十二年間の生活を忠実に守ろうとする孝子として人物設定していることは、既に出雲路修氏の指摘されている通りであり、「心¹⁸深¹⁹人²⁰憐²¹レフ」としたのは為意の文学的創造である。この人物設定に基づいて無

私の布施、相手の為には自分の最愛の妻子までも布施して悔い
ない太子の話が展開していくのである。

続いて、太子須大摩羅経では、太子の成長する姿を描き、あらゆ
ることに秀でた太子が貧しく病める人々に布施したい由を父に申
し出て許しを得、「四遠人民有從百里來者千里來者万里外來者。人
欲得食者飼之。欲得衣者与之。欲得金銀珍寶者念意与之。在所欲
得不逆其意」とある。六度集経では「欲得衣食者応声恵之。金銀
衆珍車馬田宅無求不与」と叙述しているだけである。この部分を
前田家本では「貧者遠近集乞物 免任王宝随乞悉与」、東寺本で
は「貧シキ人近キモ遠キモ集リ来テ物ヲ乞フ 王ノ財免ルシ任
レハ随乞テ必ス与フ」とある。どういう人々が布施を乞うたかは、
太子須大摩羅経のどのくらい遠方から来たかという壮大な数値を重
ねた記述を、その意をくんで要約し、前後関係から「王ノ財免
ルシ任タレバ」と説明を加え、後に力六十の白象を敵国に与えた太
子の行為を正当化しうる記述を用意しているのである。そして両
出典をふまえて「随乞悉与フ（必与フ）」と述べている。

全体的に、用いられている漢字が二出典で違う場合は、前田家
本が出典に近く、東寺本の方が割合に離れていて、和語に近いも
のが用いられている傾向が強い。

五

三宝絵と二出典との関係は、両方の出典の内容をふまえた場合
と、どちらか一方の出典に依拠している場合と、両方に無関係な

場合とがあり、各々について語句まで近似している場合から要約
の場合まで考えられる。今、三宝絵が各々の出典からどのようにに
摂取しているかを知るためには、どちらか一方の出典に依拠して
いる場合について調べるとよい。

この場合にも、どちらかの文が存在せず、一方にのみ共通する
場合と、双方の文があるが字句の表現に多少の相違がある場合と
どちらか一方の字句にのみ依拠している場合とがある。

前者の例 例文 8・22

後者の例 例文 23

例文
㊦ 葉波国王有行蓮華上白象。名須檀延。多力健闍。

例文
㊧ 父王有一白象。威猛武勢。六十象。

例文
㊨ 王有一白象。力等六十象。

例文
㊩ 復逢婆羅門来乞車。太子即以車与之。

例文
㊪ 又逢梵志来乞其車。即下妻子以車恵之。

例文
㊫ 又行人来乞車。下妻与車。

例文
㊬ 又行ケハ人車マヲ乞フ 妻ヲ下レテ車ヲ与ヘツ

出典からの摂取は、原典を大巾に省略縮小もするし、必要とあ
らば一方の出典だけの記述にも依拠して内容を豊かにする、また
一方の出典にある字句のみも採用する。太子の子の年令を明記す
ることによって、子どもの幼さいたいけなさを言外に表現し、白
象の力強さ、国防上の重要性を六十象をたおす力があると具体的

に示す語を採用し、車を与えるために乗っている妻を下して歩かせまでしたと、太子の布施に対する心入れのほどを具体的な行動によってより深く表現し、妻を犠牲にする悲劇をも暗示している。このような規準で全体の文を比較検討し、用例数を調べると次のようになる。前者の場合は「節」とし、後者は「語句」とした。前者のうち長文を要約した節は（ ）で示した。参考までに「三宝絵略注」の一文全てが出典の一方にのみ依拠した内容のものはどれだけあるかについても調べ、「文」で示した。

	太子須大摩經	語句	節	文
六度集經	二六 一七	九〇（一七） 三〇（〇）	五五 一一	

これらの例は、説話全体にわたって存在し、中ほどとか末尾とかに偏っていない。その数の多さに驚かされる。

更に注意しておきたいのは、三宝絵には出典に語句の見出されない、作者の文学的潤色が数多くあり、出典と異なる人物像として造型されている面のあることである。（別稿で取上げる予定）

六

以上の調査から、三宝絵の出典からの摂取について、次のように結論できる。

三宝絵の作者は、上巻十二話を叙述する際、太子須大摩經と六度集經とを読み、これらによって一つの説話を構成し、この説話

にふさわしい語句を、兩經典のどちらからと限定せずに、自由自在に取捨選択している。原典の大部な太子須大摩經の方から多く摂取されているが、六度集經からも見劣りするものではない。しかも日本人（内親王）を読者とした説話としてもふさわしいように、多くの文学的潤色を加えながら、須大摩太子のたぐい稀な物語をまとめ上げているのである。

（注）

1. 諸本「三宝絵集成」小泉弘・高橋伸幸 笠間書院 昭五五・六
対照 二〇「三宝絵」研究文献目録
2. 1と同じ。
3. 1と同じ。凡例
4. 「高山寺藏『三宝絵』詞章遺文」小林芳規 鎌倉時代語研究第一集 昭五三・三
5. 漢字と同格に、自立語を万葉仮名・平仮名・片仮名で書いている七語も、仮名一字ずつで計上している。漢字一字で表記してあれば、文字数は十三字減る。
6. 大正一切経刊行会
7. 愛知県立大学文学部論集 26 昭五二・三
8. 1と同じ。
9. 「大正新編大藏經」で三八〇行分が二五六行分な縮められている。
10. 東洋大学短期大学紀要 6 昭五〇・三
11. 1と同じ。

12. 「和漢の混淆」 国語国文六ノ一〇 「古訓点の研究」 所収
- 13 「三宝絵詞略注」 宝文館出版 昭二六・一〇・一〇 昭四六・八・一一 覆刻版
- 14 「三宝絵の文章について——個別的文章研究の一つの試み——」 国語と国文学 昭和二八年八月号
- 15 「東寺観智院本三宝絵詞の記載形式の成立」 国語国文二一ノ七
- 16 「三宝絵詞東大寺切管見」 国語国文二七ノ一一 「説話の語文」 所収
- 17 16と同じ。但し、引用した文の「東大寺切」は「大東寺切」となっている。
- 18 「三宝絵の編纂意識」 文学四三ノ三

(昭和四十八年三月大学院修了、就実女子大学講師)

研究室受贈圖書雑誌目録(一)

(昭和五十八年一月〜十二月)

単行本・目録

- 国文学年鑑 (国文学研究資料館) 昭和五十六年 (一九八一)
- 国文学研究資料館共同研究報告 2
- 国文学研究資料館特別展示目録・特別展示図録 (一)

雑誌・紀要

- 国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録
- 国文学研究資料館蔵和古書目録
- 国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録
- 現代表記のゆれ (国立国語研究所)
- 静嘉堂文庫所蔵歌学資料集成 (静嘉堂)
- 鶴見大学文学部論集
- 広島県上下町昔話集
- 愛知淑徳大学国語国文 第六号
- 愛文 第十九号
- 青山語文 第十三号
- 跡見学園短期大学紀要 29・30
- 跡見学園短期大学紀要 第十九号、別冊第三集
- 愛媛国文と教育 (愛媛大学) 第十四号、第十五号
- 大阪樟蔭女子大学論集 第二十号
- 大谷女子大國文 第十三号
- 大妻国文 (大妻女子大学) 第十四号
- 大妻女子大学文学部紀要 第十五号
- 学苑 (昭和女子大学) 第五二九号
- 学苑紀要 人文科学 (徳島大学) 第三十二卷
- 学大國文 (大阪教育大学) 第二十六号
- 香椎潟 (福岡女子大学) 第二十八号、第二十九号